

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

高尾第2・本郷中原遺跡

1981

長野県上伊那郡飯島町



高尾第2遺跡

序

飯島町においては、昭和48年から県営は場整備事業が実施され、今年度は飯島地区第24・26工区高尾地籍、七久保地区第25工区本郷中原地籍が実施されています。

当地籍は、古くから集落が発達した地域であり、文化財保護の立場から、飯島町遺跡調査会に依頼し調査を行ないました。

幸いにも南信土地改良事務所の御配意と、県教育委員会文化課の御指導のもとで、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝にたえません。

出土品については、飯島町陣嶺館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から感謝申し上げる次第であります。

昭和56年3月15日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二

凡 例

1. この調査は、県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査で、農家負担分について文化財保存事業(国・県補助事業)として飯島町が実施した。
2. 本調査は、昭和55年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本文の執筆は、友野良一、伊藤修が行なった。
4. 本報告の編集は、主として飯島町遺跡調査会があたった。

(発掘参加者名簿)

○高尾第2遺跡

北原健三、野村智利、北原良子、中村ゆきゑ、熊崎静子、熊崎せき、熊崎文恵、小林和子、小林一藏、小林広世、唐沢辰雄、富永芳一、小林よし子、宮下貞夫、宮下高治、羽生ゆき、上山利男、田中直敏、高坂文四郎、北原甲子三、木下みさを、堀越としあ、小林富士子、北原きのゑ、木下悦代、羽生つぎ、堀越 智、北原政子、横田愛子、滝本登喜子、小松原義人(特別参加)

○本郷中原遺跡

富永芳一、桃沢匡行、中島淑雄、吉沢由子、伊藤幸一、遠山嵩、松下国夫、熊崎文恵、三松ますみ、森谷慶福、矢沢亀五郎、新井 勝、田中直敏、山口藤子、桃沢和子、米山千勢、藤井いなえ、林 晴子、織田正己、佐々木大治、中島 哲、小林佳子、熊崎静子、北原甲子三

目 次

序

凡 例

目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観	2
第1節 位置	2
第2節 地形・地質	2
第Ⅱ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまで	4
第2節 調査日誌	4
第Ⅲ章 遺構	5
第1号住居址	5
石棺墓	5
配石	5
土塁群	5
第Ⅳ章 遺物	10
1. 土器	10
2. 石器	11
第Ⅴ章 まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 100000)	第2図 地形図 (1 : 2000)
第3図 遺構配置図 (1 : 240)	第4図 平面図 (A地区) (1 : 120)
第5図 平面図 (B地区) (1 : 120)	第6図 平面図 (C地区) (1 : 120)
第7図 出土土器 (1 : 2)	第8図 出土土器 (1 : 2)
第9図 出土土器 (1 : 2)	第10図 出土土器 (1 : 2)
第11図 石器実測図 (1 : 4)	

図 版 目 次

P 1 第1号住居址出土土器	P 2 第1号住居址
P 3 第1号住居址	P 4 土塁群 (北から)
P 5 土塁群 (東から)	P 6 石棺墓 (南から)
P 7 石棺墓 (北から)	P 8 第1号住一括土器
P 9 97号土塁	P 10 106号土塁
P 11 107号土塁	P 12 108号土塁
P 13 109号土塁	P 14 112号土塁
P 15 128号土塁	P 16 出土土器

第Ⅰ章 遺跡の概観

第1節 位置

高尾第2遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字飯島 3850番地に所在する。

遺跡は、中央アルプス山麓の台地上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線飯島駅で下車し、北西へ約2kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高717mをはかる。

第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプス南駒ヶ岳山麓の台地に位置する。遺跡は、中田切川により形成された扇状地の扇頂部にあり、南側の沢により、舌状の台地となっている。

調査地区の土層については、水田、桑園により搅乱されており、礫層の基盤の上にローム層、黒褐色土層、耕作土層が堆積していたものと思われる。



第1図 位置図 (1:100,000)



第2図 地形図(1:2000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業飯島地区第24・26工区にある高尾第2遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

(飯島町遺跡調査会)

会長	熊崎安二	(教育長)
理事	片桐修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下静男	(")
	北原健三	(")
	桃沢匡行	(")
	松崎研定	(")
	中島淑雄	(")
	片桐佳彦	(")
	小林嘉男	(")
監事	池上勇	(飯島町監査委員)
	中野武司	(")
幹事	吉沢内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢長実	(" 係長)
	伊藤修	(" 主事)
	宮下淑江	(" 主事)

(発掘調査団)

団長	友野良一	(日本考古学協会会員)
調査員	伊藤修	(飯島町教育委員会主事)
"	和田武夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	中村正純	(飯島町)

第2節 調査日誌

高尾第2遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、昭和55年4月24日より着手し、昭和56年3月20日に完了した。

○調査は、調査地区全体に2m四方のグリッドを設定し行なった。

○遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。

○造構については、平面図の他にできる限り造構断面の土層も記録を行なった。

第Ⅲ章 遺構

調査地区内より、住居址1軒、石棺墓1箇所、配石2箇所、土塙（ピット・マウンド）130箇所が検出された。

第1号住居址

調査地区的南東より検出された。住居址はローム層を幅60cm、深さ20cmの円形に掘られた溝により区画される。長径約15mの梢円形を呈する。溝が4箇所で切れているところから複数の住居址とも考えられるが、南西側に張り出し部をもった1軒の住居址と考える方が妥当と思われる。床面は比較的平坦で東に向って自然の傾斜がみられる。柱穴は住居址内に22箇所みられるが土塙との区別はつかない。しかしP80, 90, 106, 115等は溝にそっており柱穴でないかと思われる。炉は住居址内より認められなかつたが、住居址の南西側と中央やや北東の2箇所に焼土がみられた。

遺物は、住居址内床面より比較的多くの土器片が出土した。また南西側には床面より埋められた一括土器が検出された。石器の出土は少なく、打製石斧、横刃形石器等が数点出土した。土器からみて縄文時代晚期の住居址と考えられる。

石棺墓

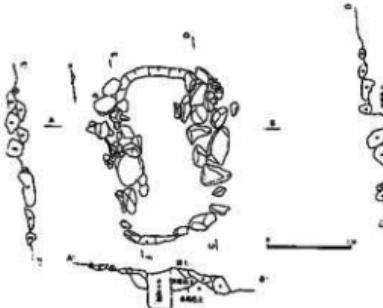
遺跡の北西にグリットによる分布調査で確認された。第1号住居址、土塙群より北西に約30m離れている。遺構は2m×1.5m×探さ30~35cmの長方形に大小の自然石を組み合わせて造られている。遺構は中心部を耕作により破壊されており、遺物の出土はカク乱層より縄文時代晚期の土器片が僅かに出土したのみである。

配石

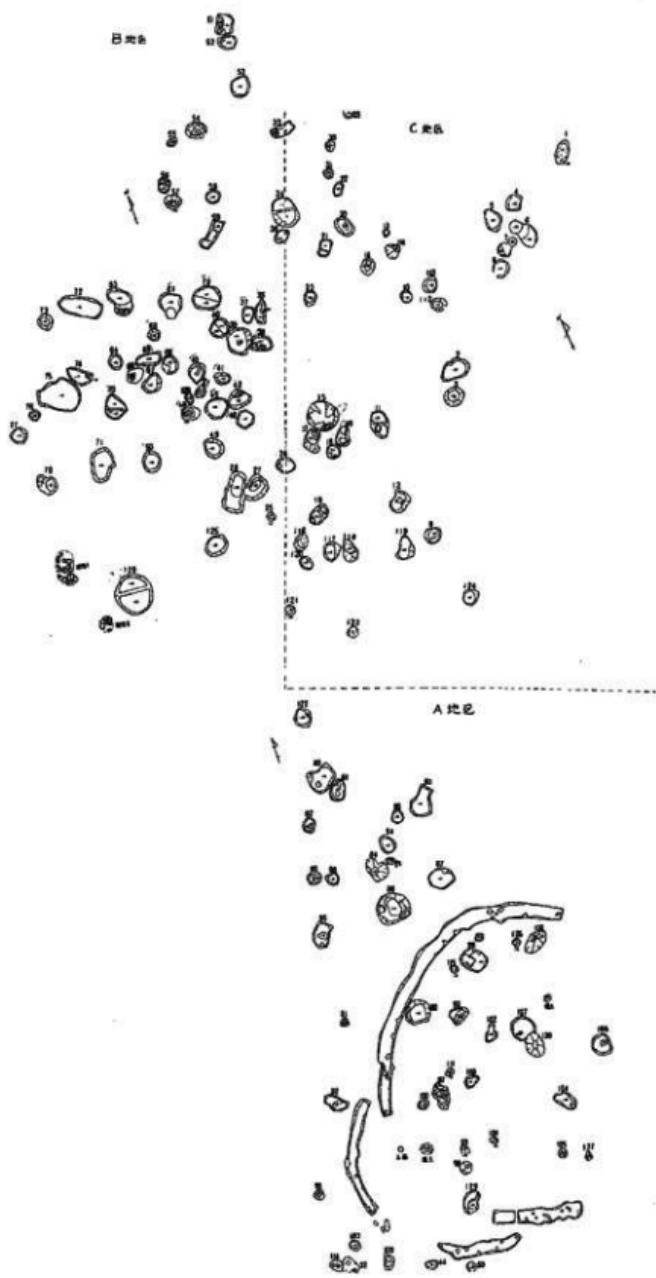
土塙群の西側より2箇所検出された。いずれも茶褐色土層に数個ないし10数個の石を配し構成されている。石は火を受けた跡はみられない。配石の間より集中して縄文時代晚期の土器片が出土した。

土塙群

調査地区内より130箇所の土塙が検出された。土塙は第1号住居址の北に分布しており、形状、大きさはさまざまである。焼土、石を伴なうものは少ない。遺物は縄文時代晚期の土器片、石器が出土している。

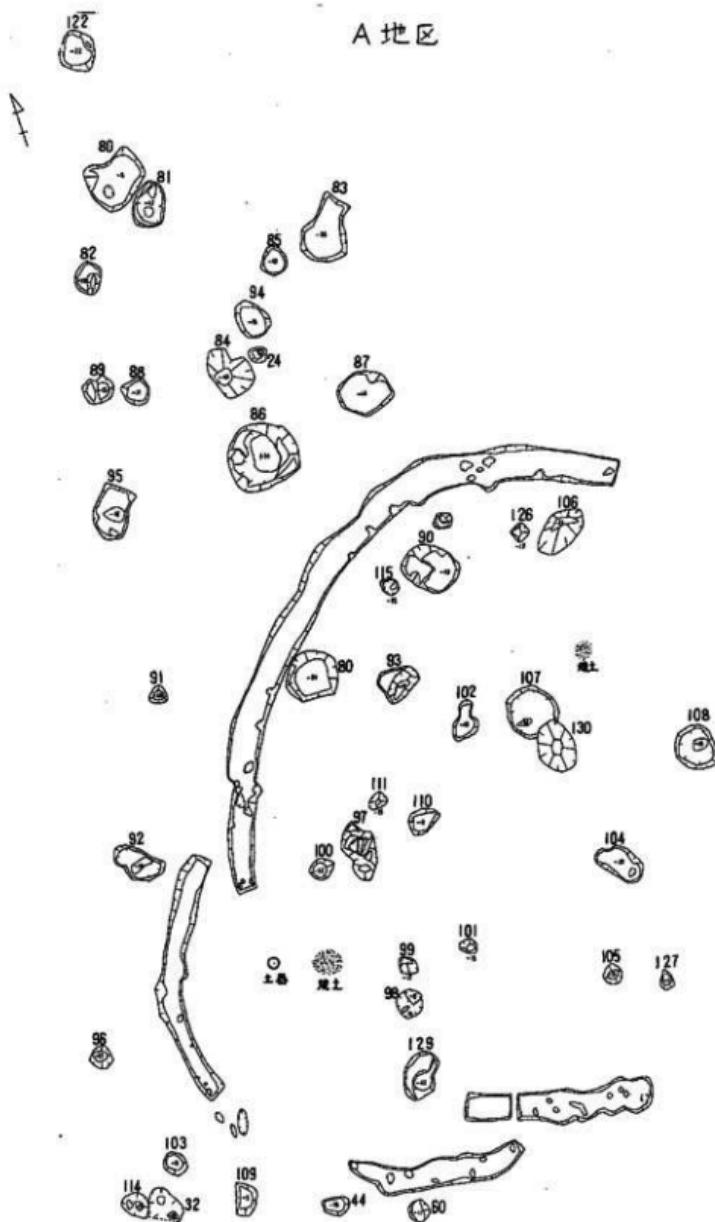


石棺墓 (1:60)



第3図 進撃配図図 (1 : 240)

A 地区

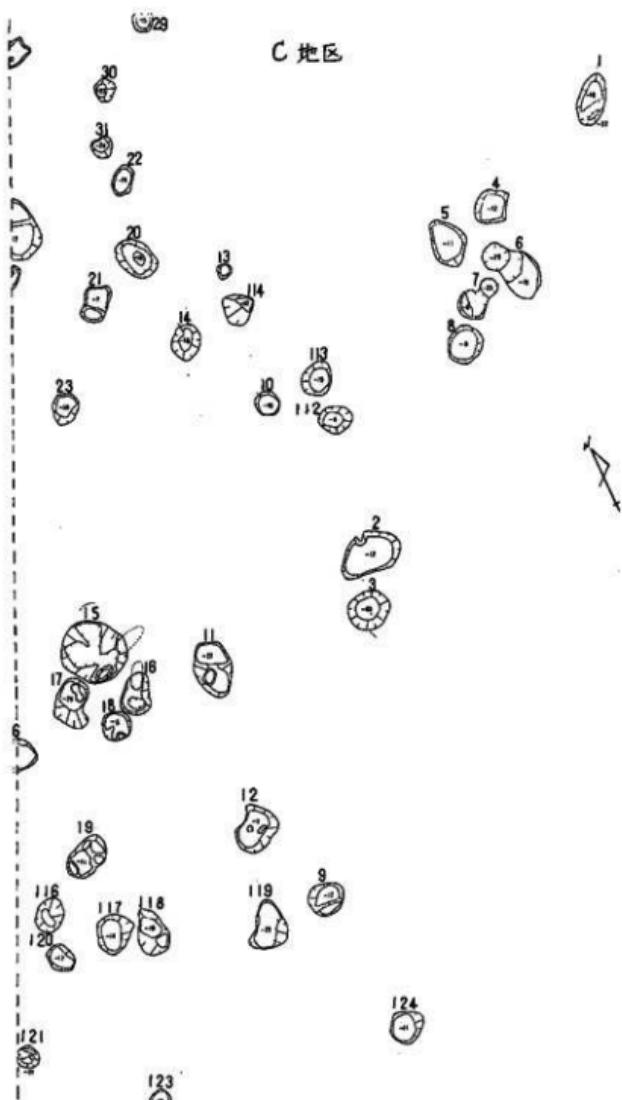


第4図 平面図(A地区) (1:120)

日地区



第5図 平面図(日地区) (1 : 120)



第6図 平面図 (C地区) (1 : 120)

第IV章 遺 物

1. 土器

今回の調査により出土した土器は、この時期としては多い方である。しかしながら、土器の大方が小破片のため復元は1個体にとどまった。確認された土器のうちI群は非常に少なかった。I群土器は縄文中期後葉に属するものである。

確認された土器はI～VII群に分類することができる。I群は前述のとおり、II群は縄文晚期、条痕文土器、III群は隆線文が施された土器、IV群土器は、条線が施された土器、第V群は、削痕調整土器、VI群土器は、垂文土器、VII群土器は凸帯文が施された土器である。

第I号住居址出土土器

(1) 第I群土器

縄文時代中期に属するもので、1は口縁部ソーメン状の粘土紐を貼付した變形土器、曾利I式に比定されるもの、24は渦巻文と竹管文が施された曾利II式土器、25は隆線に刻目を施し、竹管具により併行線文が施された曾利II式に併行すると考えられる土器。

(2) 第II群土器

本群の土器はいわゆる条痕文を主体とする東海系の土器である。[A]2～15、18までは条痕が施された深鉢形土器。16、17は横及び斜状に条痕が施された土器。19は条線文土器、20は口縁部破片で口舌に連続指頭痕がめぐり、頭部は横位に条痕で施された深鉢形土器、21は条線文が施された土器。22、23は口縁部の破片で、口舌は垂文帶で頭部下は斜位に条痕が施された深鉢形土器。[B]26～33は貝殻腹縁による条痕文土器、34は竹管具による条線文土器、35～37、41はやや太目の併行沈線文土器。

(3) 第III群土器

38は一条～三条の隆線文が横位に施された變形土器の破片で、器面に黒煙が付着している土器である。42は隆線が工字文風に施された變形土器の破片である。

(4) 第IV群土器

39は二条の併行沈線文土器片、40は口縁部に一条の沈線が引かれた變形土器の頭部の破片と思われる土器片。

(5) 第V群土器

a 43、44は器面は削痕による調整がなされている變形土器、器面の砂粒の動きがうかがえる。

グリット出土土器

第II群土器

[A]47、48は貝殻腹縁による条痕文土器。[B]46、49～61は縦、横、斜に施文された条線文土器である。[C]62、細い隆線が斜位に引かれた變形土器口縁部、[D]63は、苗削りで調整された深鉢形土器破片。

第IV群土器

45は数條併行沈線が引かれた變形土器の頭部の破片と思われる土器片。

第V群土器

(a)69~71は、器面が削痕による調整がされている變形土器、器面に砂粒の動きが見られる。

第VI群土器

65, 72~82は垂文の鉢形及び變形土器である。

第VII群土器

64は、口縁部に凸帯文が水平にめぐらされ、頸部に一条の沈線が施された變形土器である。

石棺墓及び土塗出土土器

第V群土器(b)

66は石棺墓から出土した土器である。垂文の變形土器の胸部破片である。67は10号土塗より検出された垂文變形土器である。68は25号土塗から発見された變形土器口縁部である。口縁は波状縁、口縁の額に一条の凹が刻まれている。色調は赤褐色で器面の一部に炭が付着している。

(第1号住居址出土の土器)

本住居址出土の完形土器としては唯一のものである。口径は22.3cm、胴径27.5cm、高さ34cm、厚さ6~7mm、底部の径は8.5cmを測る。色調は灰褐色、胎土に石英粒、雲母を含む。内壁に焦付が見られる。また外壁には炭化物が相当多く付着している。器面の調整は荒く削痕が目立つ。

2. 石器

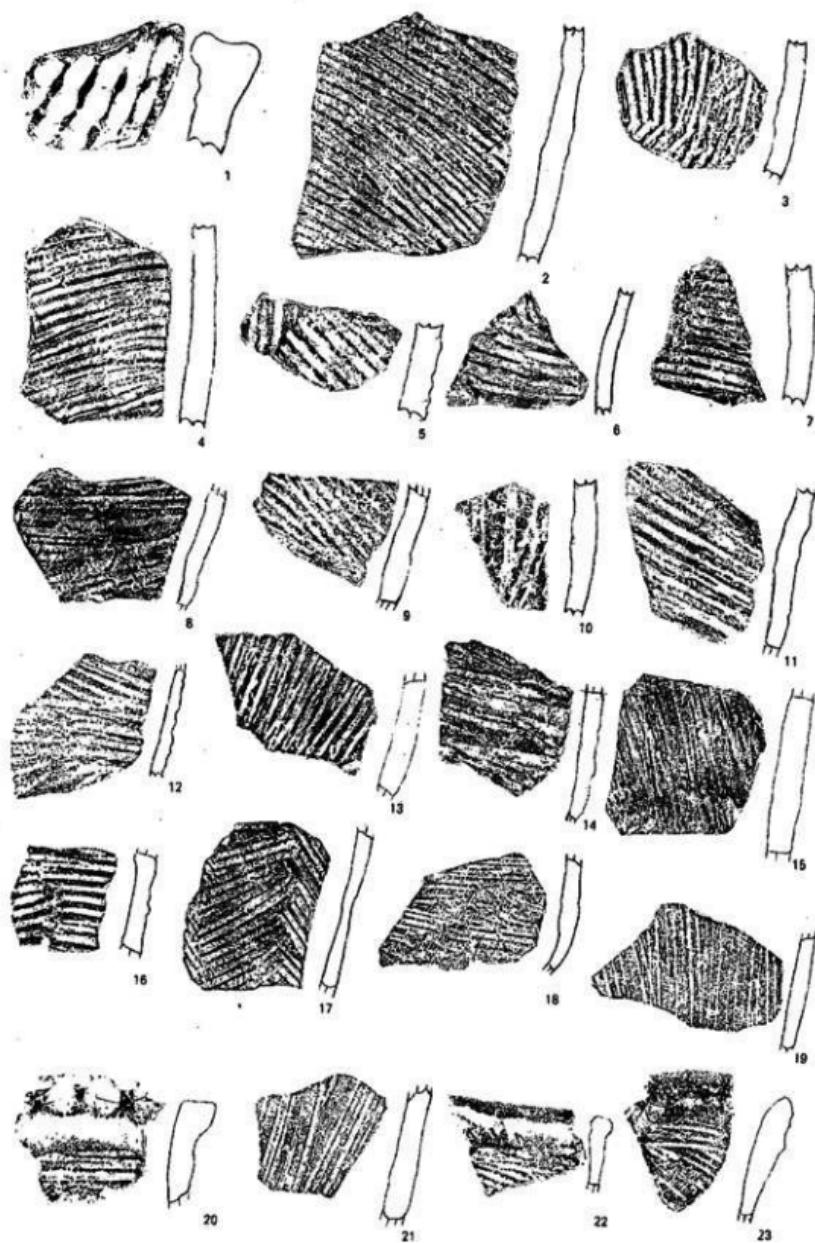
今回の調査により出土した石器は、別表のとおりである。打製石斧、横刃形石器を中心にして調査地区全域より出土した。

表1 出土石器一覧表

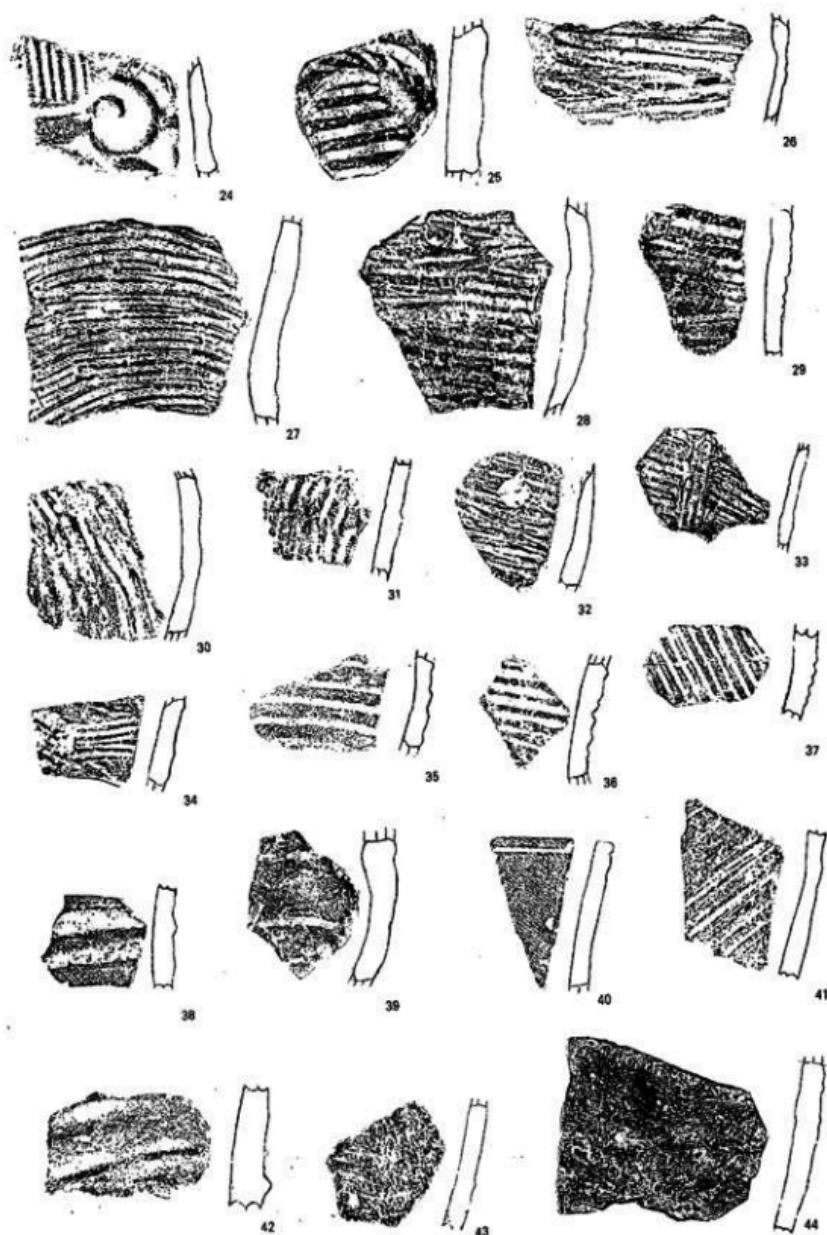
名 称	完 形	欠 损	合 计
打 製 石 斧	14	28	42
磨 製 石 斧	2	7	9
石 錐	2		2
石 鋸	1		1
磨 石	7		7
横 刃 形 石 器	9	29	38
石 盔		3	3
ス ク レ ー パ ー	1		1
ド リ ル	1		1
黒 曜 石 片		35	35



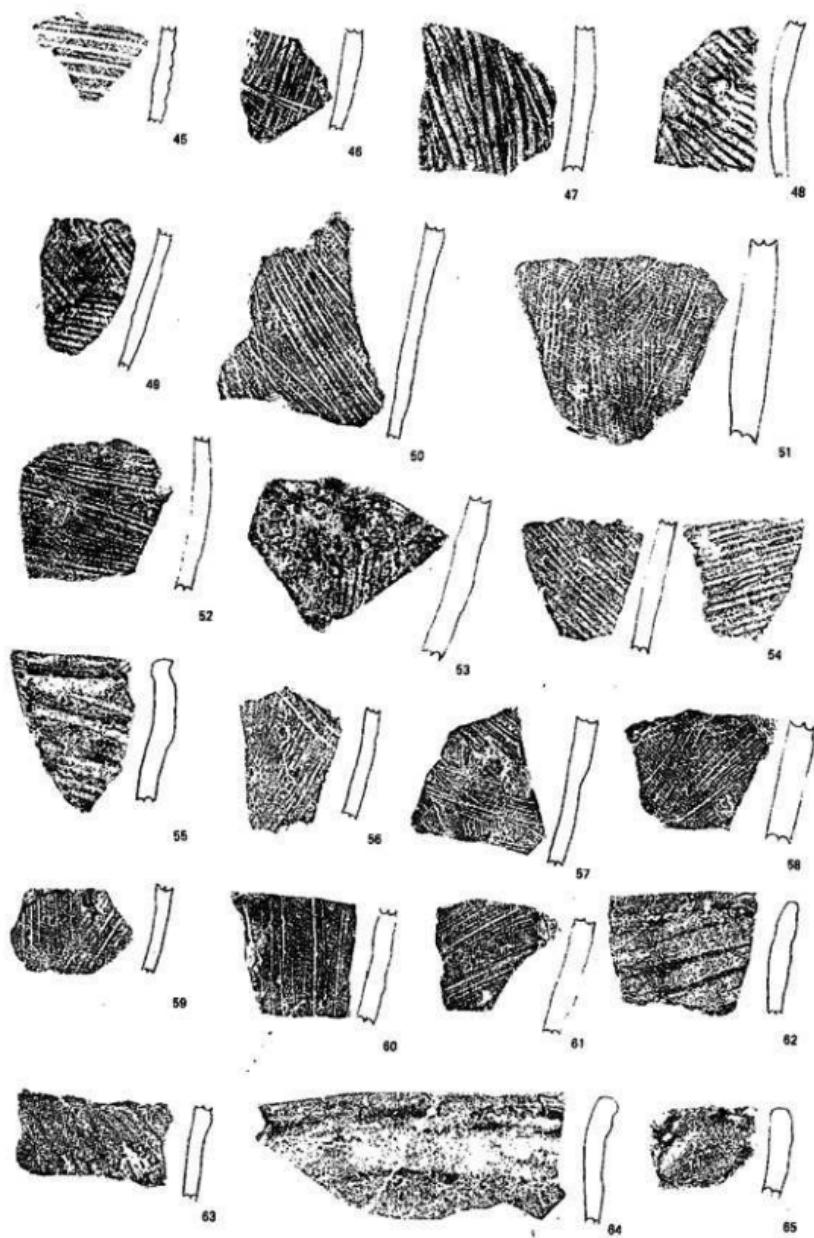
P 1 第1号住居址出土土器



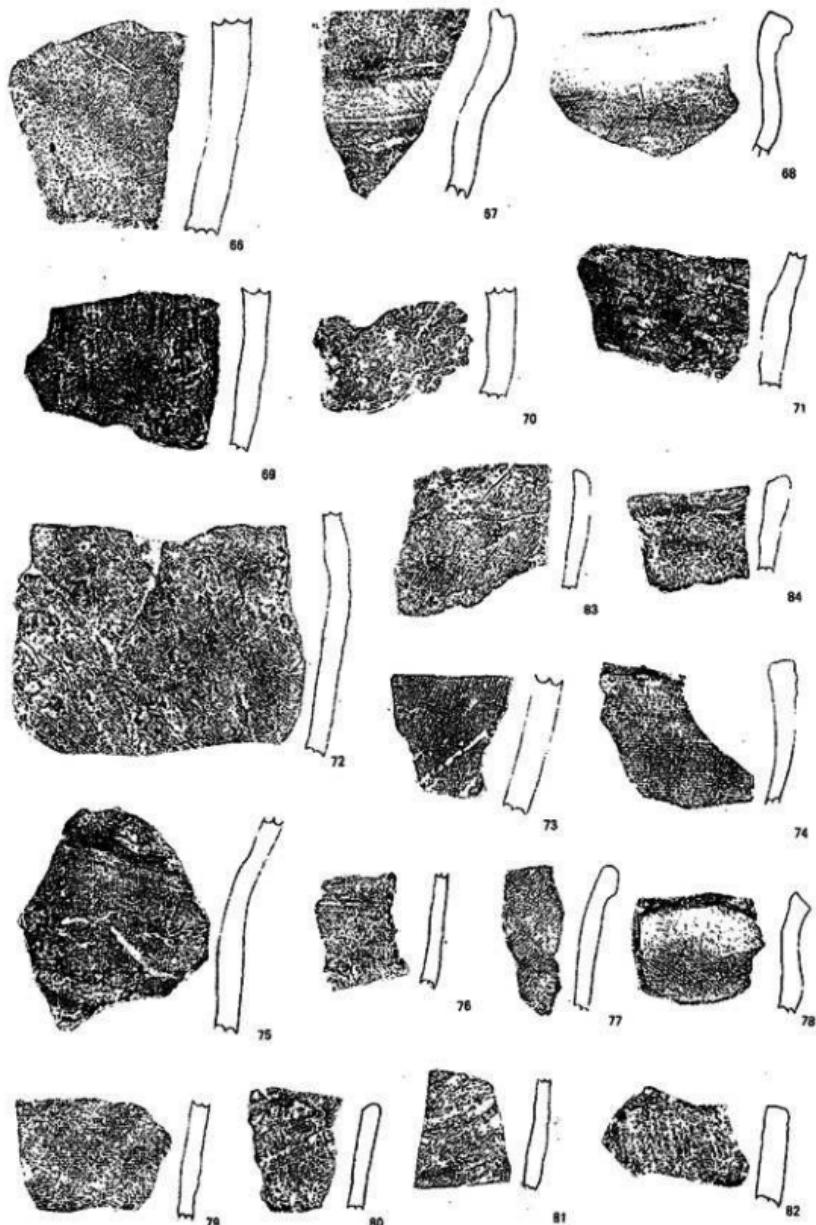
第7図 出土土器 (1 : 2)



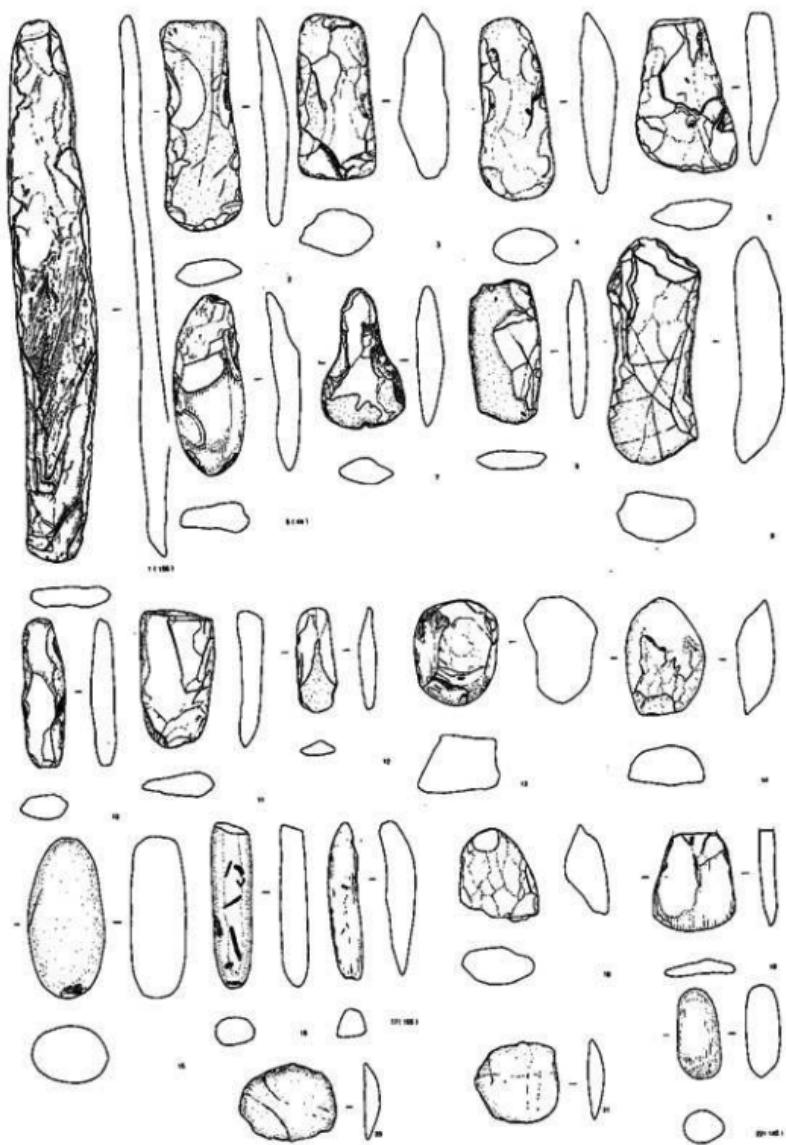
第8図 出土土器 (1 : 2)



第9図 出土土器 (1 : 2)



第10図 出土土器 (1 : 2)



第11図 石器実測図 (1:4)

第V章 まとめ

高尾第2遺跡は、飯島町高尾部落の東端。中田切川によって形成された扇状地扇頂部の舌状台地に位置している。現況は畠と田になっており一部は搅乱されている。疊層の上にローム層が堆積した地質構造である。付近一帯は縄文晩期の遺物が出土することで、以前から注目されていた遺跡である。

今回検出された遺構は、住居址1軒、石棺墓1基、配石2箇所、土壙、ピット・マウンド合わせて130箇所が検出された。

1. 住居址。住居址の西約半分は周溝状の溝によって区画されているが、東半分は自然の傾斜のため溝は認められなかった。径が15cmにわたる大きさであるため、疑問があったが、焼土、柱穴、埋甕の所在、出土状況から、住居址と判断した。出土遺物は、完形深鉢形土器を中心として、垂文粗製土器50%、有文土器50%の割で出土した。垂文粗製深鉢形土器の多いことは今後垂文土器の研究上重要な資料となろう。

そのほか、打製石斧、横刀形石器が数点検出された。伊那地方では、晩期の住居址は、駒ヶ根市荒神沢遺跡、宮田村ニツヤ遺跡、高尾第2遺跡で、3軒の住居址が発見されたことになる。

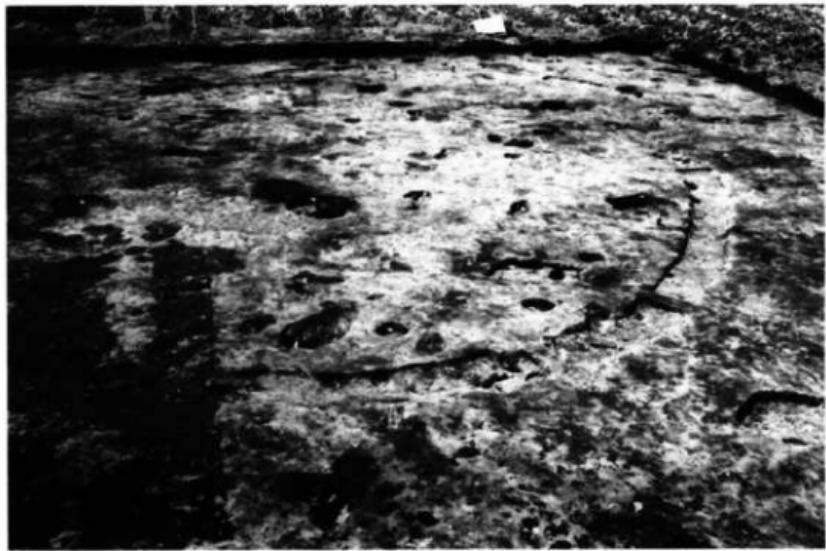
2. 石棺墓。南北2m、東西1.5m深さ30~35cm、主軸の方向は南-北である。石棺は割り合い浅い所から発見された。耕土も浅いところより、盛土がなされた墓であったかも知れない。棺は耕作で破壊されている。棺の内部からは何も検出されなかったが、搅乱された層から晩期の土器が検出された。伊那地方では、晩期の石棺墓は、これが初見である。

3. 土壙群。住居址より石棺墓の間に、大小130個の土壙が検出された。土壙群の多かった遺跡は、駒ヶ根市荒神沢遺跡、宮田村ニツヤ遺跡があげられる。この時期の遺跡には土壙の多いことが特徴としてあげられる。

4. 土器。本遺跡出土の縄文晩期の土器は、条痕文土器、条線文土器、垂文土器に大別される。水遺跡出土の土器は発見されなかった。駒ヶ根市荒神沢遺跡では水式の土器が発見されている。宮田村ニツヤ遺跡では本遺跡と全く同じ東海系櫻王式土器であることに注目される。このほか、うどん坂第2(中央道敷地内発掘調査)遺跡からも櫻王式の遺物が相当量出土している。飯島町では縄文時代晩期には東海系の文化の影響が強かったように思われる。

報告書の作成にあたり、多くの方より献身的な御支援をいただいたことに対して、心より感謝の意を表するものであります。

(団長 友野 良一)



P 2 第1号住居址



P 3 第1号住居址



P 4 土塙群（北から）



P 5 土塙群（東から）



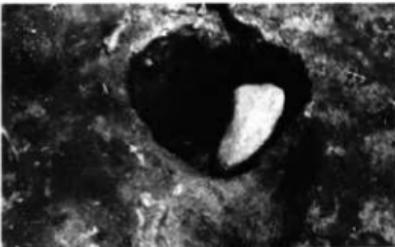
P 6 石棺墓（南から）



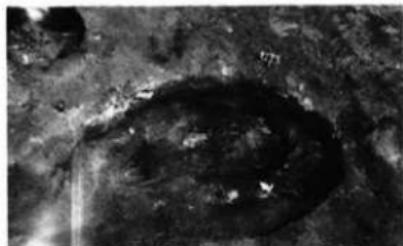
P 7 石棺墓（北から）



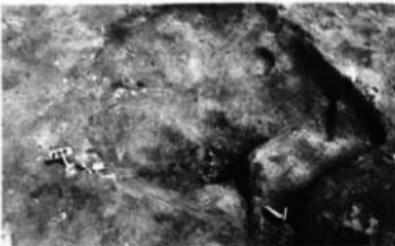
P 8 第1号住一括土器



P 9 97号土坯



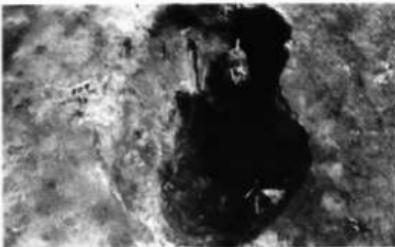
P 10 106号土坯



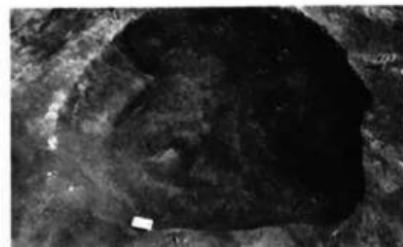
P 11 107号土坯



P 12 108号土坯



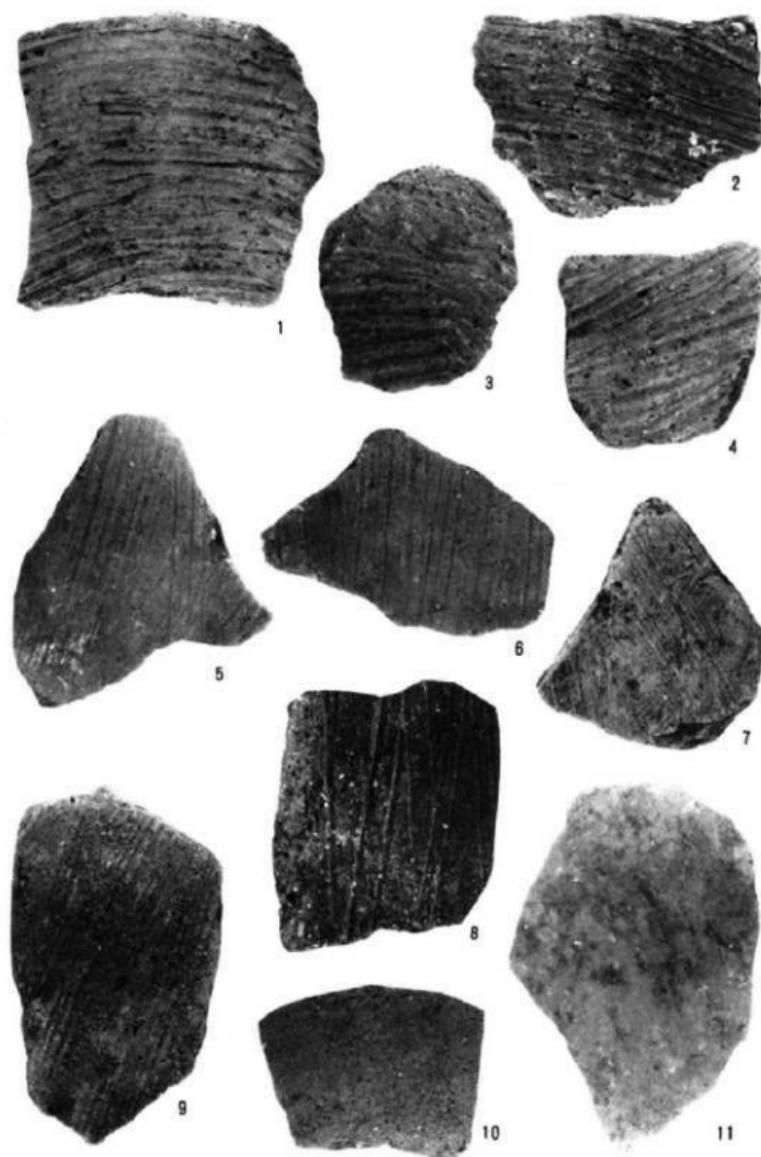
P 13 109号土坯



P 14 112号土坯



P 15 128号土坯



P 16 出土土器

本郷中原遺跡

目 次

目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観	2
第1節 位置	2
第2節 地形・地質	2
第Ⅱ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまで	4
第2節 調査日誌	4
第Ⅲ章 遺構	5
縄文時代の住居址	6
平安時代の住居址	8
中世の遺構	11
その他の遺構	12
第Ⅳ章 遺物	12
第Ⅴ章 まとめ	13

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 100000)	第2図 地形図 (1 : 2000)
第3図 遺構配置図 (1 : 300)	第4図 第3号・7号住居址平面図 (1 : 60)
第5図 第5号住居址 (1 : 60)	第6図 第2号住居址 (1 : 60)
第7図 第4号住居址 (1 : 60)	第8図 第6号住居址 (1 : 60)
第9図 溝状遺構・柱穴 (1 : 60)	

図 版 目 次

P 1 調査風景	P 2 調査風景
P 3 第3号・7号住居址	P 4 第5号住居址
P 5 第2号住居址	P 6 第4号住居址
P 7 第6号住居址	P 8 堀
P 9 縄文時代遺物出土状況	P 10 平安時代遺物出土状況
P 11 中世遺物出土状況	

第Ⅰ章 遺跡の概観

第1節 位 置

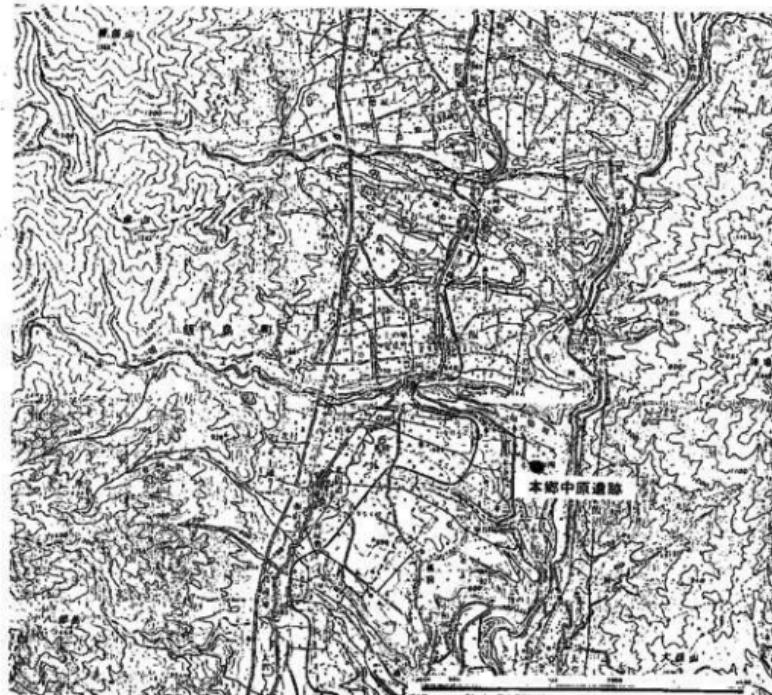
本郷中原遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字本郷121番地の1に所在する。

遺跡は、天竜川の河岸段丘上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線伊那本郷駅で下車し、東へ約2kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高573mをはかる。

第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプスより流れる与田切川により形成された扇状地の扇端部に位置する。遺跡の東側は天竜川の河岸段丘崖であり、又北側も東西に走る崖地となっている。

調査地区の土層については、礫層の基盤の上にローム層、黒褐色土層、耕作土層が堆積している。



第1図 位置図 (1 : 100,000)



第2図 地形図 (1 : 2000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業七久保地区第25工区にある本郷中原遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町追跡調査会に委託し実施した。

〔飯島町追跡調査会〕

会長	熊崎安二	(教育長)
理事	片桐修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下静男	(")
	北原健三	(")
	桃沢匡行	(")
	松崎研定	(")
	中島淑雄	(")
	片桐佳彦	(")
	小林嘉男	(")
監事	池上勇	(飯島町監査委員)
	中野武司	(")
幹事	吉沢内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢長実	(" 係長)
	伊藤修	(" 主事)
	宮下淑江	(" 主事)

〔発掘調査団〕

団長	友野良一	(日本考古学協会員)
調査員	伊藤修	(飯島町教育委員会主事)
"	和田武夫	(長野県考古學会員)
調査補助員	富永芳一	(飯島町)

第2節 調査日誌

本郷中原遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、昭和55年7月23日より着手し、昭和56年3月20日に完了した。

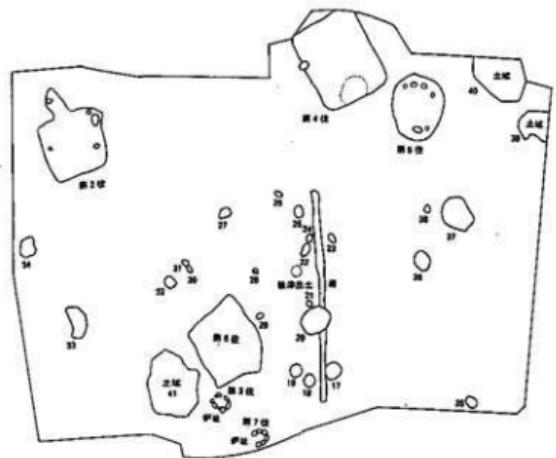
○調査は、調査地区全体に2m四方のグリッドを設定し行なった。

○遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。

○造構については、平面図の他にできる限り造構断面の土層についても記録を行なった。

第Ⅲ章 遺構

今回の調査で縄文時代中期の住居址3箇所、平安時代の住居址3箇所、空堀1箇所、土塹柱穴大小41箇所、溝状造構1箇所が検出された。



縄文時代の住居址

第3号址・第7号址

調査地区の中央に、それぞれ位置する、開田により住居址は破壊されたと思われ、石圓炉のみ確認された。

炉址は、いずれも10~50cmの丸みのある自然石を配して造られており、焼土が僅かにみられた。床面は、平坦であるがやわらかい。周溝、柱穴、その他の施設は確認されなかった。遺物は、炉址付近、床面とも少なかった。土器片は縄文時代中期後半に比定される。

第3号住居址と第7号住居址の時期的な差については、不明である。

7住 延址



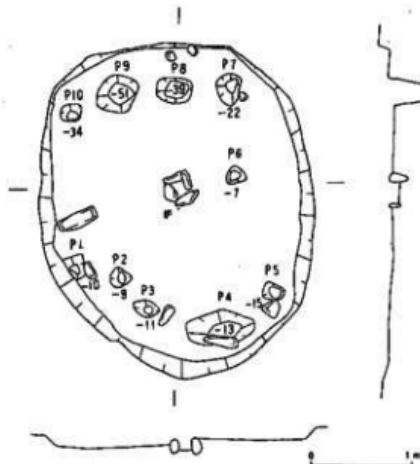
3住 延址



第4図 第3号・7号住居址平面図 (1:80)

第5号住居址

本 址 位 置		調査地区西側、第4号住居址北					
ブ ラ ン	楕 圓 形	規 模	南北 - 3.3 m 東西 - 2.7 m	主軸方向	南北		
壁 高	南5 cm 東10cm	北10cm 西10cm	壁の状態	水田により壁の上部が破壊されている。 南側はゆるやかな傾斜となっている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。平坦ではあるが軟弱である。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	10箇所	主柱穴	4本主柱穴と思われる (P ₃ , P ₅ , P ₇ , P ₉)				
炉 の 位 置	中 央	形 式	石 囲 炉	規 模	30cm × 35cm		
土塁壁外施設 そ の 他	確認されない。						
遺物出土状況	覆土下層、床面上からの遺物の出土が多い。縄文時代中期前葉。						

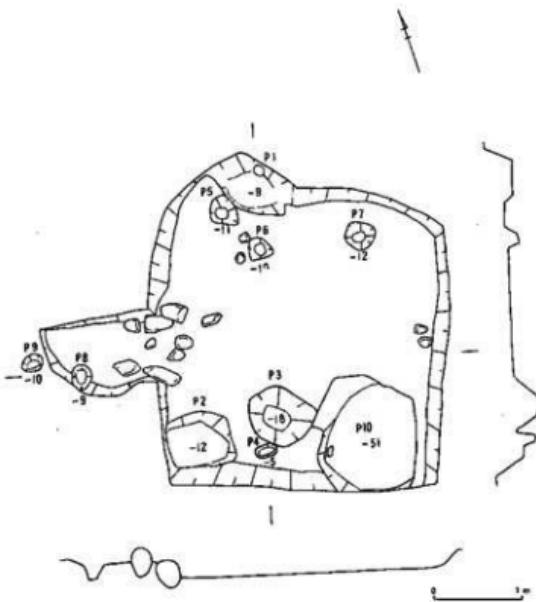


第5図 第5号住居址 (1 : 60)

平安時代の住居址

第2号住居址

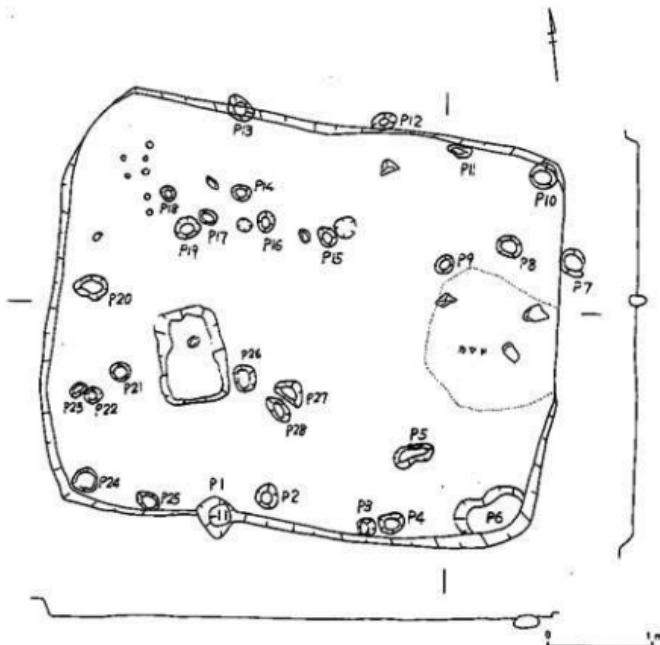
本 坂 位 置		調査地区南西						
ブ ラ ン		方 形	規 模	南北 - 3.4 m 東西 - 3.4 m		主軸方向		
壁 高		南30cm 東20cm	北35cm 西20cm	壁の状態	傾斜がみられる			
床		ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが軟弱である。						
周 溝		認められない。						
柱 穴		8箇所	主柱内	P ₂ , P ₅ , P ₇ , P ₁₀				
カマドの位置		西壁中央	形 式	石組粘土カマド		規 模		
土塙壁外施設		確認されない。						
その 他								
遺物出土状況		覆土下層、床面より出土。平安時代。鉄鏃、刀子、他。						



第6図 第2号住居址 (1 : 60)

第4号住居址

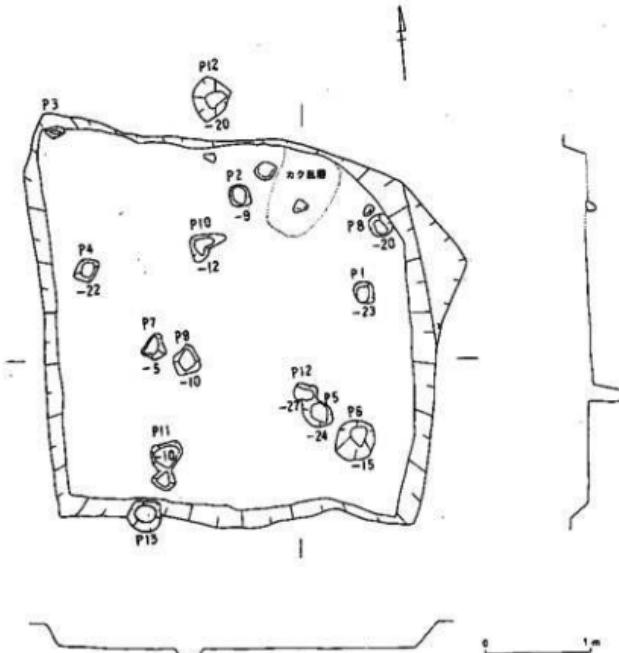
本 址 位 置		調査地区西側						
ブ ラ ン	隅丸方形	規 模	南北 - 3.8 m 東西 - 4.8 m	主軸方向	東西			
壁 高	南15cm 北10cm 東 cm 西15cm	壁の状態	水田により上部が破壊されている。					
床	ローム層を掘り込んで作られている。床面は平坦で軟弱である。							
周 溝	認められない。							
柱 穴	28箇所	主内	8本主柱穴と思われる。P ₁ , P ₄ , P ₆ , P ₁₀ , P ₁₂ , P ₁₃ , P ₂₄	P ₁				
カマドの位置	東壁中央	形 式	石組粘土カマドと思われる。	規 模	m × m			
土塁壁外施設	住居址内・中央西側にみられる。							
その 他								
遺物出土状況	覆土よりの遺物の出土は少ない。平安時代。灰釉陶器他。							



第7図 第4号住居址 (1 : 60)

第6号住居址

本址位置	調査地区中央やや西側、第1号住居址北					
プラン	方 形	規 模	南北 -3.5 m 東西 -3.6 m	主軸方向		
壁 高	南15cm 北20cm 東20cm 西20cm	壁の状態	北側は直にちかく、他はゆるやかな傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦であるが、ピット(穴)が多くやわらかい。					
周 溝	認められない。					
柱 穴	13箇所	主柱穴	4本主柱穴と思われる。			
炉 の 位 置		形 式		規 模		
土塙壁外施設 そ の 他						
遺物出土状況	遺物の出土は、覆土、床面とも少ない。土師器、灰釉陶器他。					



第8図 第6号住居址 (1 : 60)

中世の遺構

柱穴

調査地区南東、堀の外側と調査地区中央の溝状遺構付近の2箇所に柱穴が確認された。

堀の外側の柱穴は、堀より1m～2mの外側を堀に平行して2m～6m間隔に11箇所ほどみられる。いずれも直径20cm～40cm前後の円形あるいは楕円形をした柱穴で、ローム層を僅かに掘込んでいる。

溝状遺構付近の柱穴は、溝をはさんで北側、南側にみられる。直径40cm～80cmの円形、楕円形を呈している。溝状遺構に関連したものか否かは不明である。しかし、溝状遺構中央南側より鉄滓が出土しており、それを中心にして、P21、P22、P28、P29が等間隔で配されている。

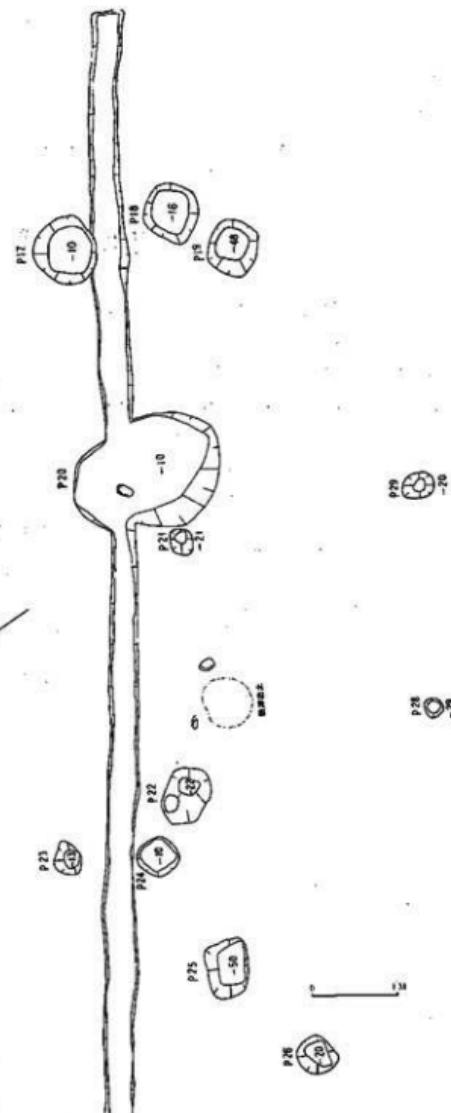
いずれの柱穴からも遺物の出土はないが、付近より南北朝、室町時代の陶器が多く出土しており、南北朝、室町時代の遺構と思われる。

堀

調査地区的南東に、段丘崖に平行して堀が確認された。

堀の北東は、調査地区内で切れおり、南側は地区外の段丘崖まで続いている。(調査地区外グリット調査により確認)

堀は幅70cm～140cmでローム層を20cm～30cm掘り込んで造られており、堀の底部は、ゆるやかな船底形で、覆土下層には、10cm～30cmの自然石か砕石80個ほどみられた。



第9図 溝状遺構・柱穴 (1:60)

遺物の出土は、比較的少なく、陶器片が数片出土したのみである。出土遺物からみて南北朝時代の遺構と思われる。

その他の遺構

土塁（1, 11, 16, 20, 33, 34, 36, 37, 39, 40, 41）

調査地区内より11箇所の大形の土塁が確認された。

土塁は調査地区全域にわたっており、直径2m以上で円形、方形、不整形とさまざまである。

土塁覆土底部からの遺物の出土は少なく、時期については不明である。

第IV章 遺 物

縄文時代中期前葉の土器片から、江戸時代初期の陶器まで出土しており、長い間、生活の舞台であったと考えられる。

縄文時代の遺物は、縄文時代中期前葉の土器片。中期曾利Ⅱ～Ⅲ期に比定される土器片で比較的少ない。平安時代の住居址からは、土師器を中心にして灰釉陶器、鉄製品等が出土した。堀、溝状遺構、柱穴からは南北朝時代より室町時代の陶器が多く出土したが、中には安土桃山時代、江戸時代初期の天目茶碗、灰釉陶器等もみられる。また数点ではあるが中国産の青磁片、仏花器、灯明皿等も出土しており豪族の居館と考えられる。溝状遺構の南側からは铁滓が出土しており銀治屋場と考えられる。

表1 出土陶器一覧表

番号	台帳番号	器種(名称)	産地	時代	番号	台帳番号	器種(名称)	産地	時代
1		灰釉皿	猿投	10～11C	30	192	天目茶碗	瀬戸	室町
2	1	"	"	"	31	81	灰釉鉢	"	"
3	4	鉢	"	"	32	38	摺り鉢	"	"
4	62	"	"	"	33	211	青磁	中國	南北朝
5	161	"	"	"	34	2	"	"	"
6	7	甕	常滑	南北朝～室町	35	194	天目	瀬戸	室町
7	159	甕(須恵)	美濃須恵窯	8～9C	36	167	鉄袖	"	"
8	44	鉢	瀬戸	室町末	37	51	天目茶碗	"	"
9	12	"	"	"	38	152	"	"	"
10	111	灯明皿	"	"	39	97	"	"	"
11	117	不明	桃山	40	59	"	"	"	"
12	29	皿	"	"	41	39	天目袖(不明)	"	江戸(初)
13	246	仏花器	"	"	42	32	鉄袖(")	"	桃山
14	102	不明	"	"	43	140	長頸壺	"	"
15	98	灰釉皿	"	"	44	106	天目袖(不明)	"	"
16	56	灰釉鉢	"	江戸(初)	45	143	"(不明)	"	"
17	116	灰釉(不明)	"	桃山	46	171	"(不明)	"	江戸(初)
18		灰釉皿	"	"	47	97	量	"	"
19	10	甕	"	"	48	166	鉄袖 長頸壺	"	"
20	143	灰釉皿	美濃	江戸(初)	49	143	天目袖 漢鉢	"	"
21	56	灰釉(不明)	瀬戸	"	50	217	不明	"	"
22	34	"(不明)	桃山	"	51	3	鉄袖(不明)	"	桃山
23	213	"(不明)	"	"	52	144	"(不明)	"	"
24	116	"(不明)	"	"	53	56	志野	"	"
25	4	"(不明)	"	"	54	127	鉢	江戸	江戸(後)
26	64	"(不明)	"	江戸(初)	55	190	磁器 瓶	"	江戸(末)
27	1	灰釉 長頸壺	"	桃山	56	3	土師 杯	平安(末)	平安
28	5	"	"	江戸(初)	57	130	土師壺 カキ目	"	"
29	11	天目茶碗	"	室町					

(※ 台帳同番号は同地点より伴出したものである)

第V章 まとめ

本郷中原遺跡は、大字本郷121番地の1に所在する。遺跡は天竜川の右岸第二段丘上に位置する。遺跡の東の第一段丘には、中世の居館址と考えられる跡や、古い堂の跡、室町期と思われる五輪塔、古い神社跡、古地名などがあり、奈良・平安・中世時代の本郷村の中心的存在であったと考えられる。遺跡はこの第1段丘を見下ろす段丘東端に位置し、古代、中世を通じて住居地占地として最適の場所であったと思われる。

今回の調査では、縄文時代中期の住居址3箇所、土壙柱穴址等41箇所、空堀1箇所、溝状造構1箇所が検出された。

1. 縄文時代中期後葉の集落は、ここを中心として南と北の果樹園にひろがっていることが分布調査の結果確認された。おそらく縄文時代の集落は第2段丘に添って南北に細長い形の集落形態をなしていたのではないかと思われる。

2. 空堀、検出された空堀は実測図に見るよう屋敷の土塁と堀という性質のものと思われる。巨大な館址にともなう堀ではなく小規模な形のものである。この堀の底から南北朝時代中国青磁の破片が発見された。おそらく、この居館は南北朝時に造られたものであろう。

3. 住穴址、柱穴は東西に走る溝状造構の北側、南側に検出されたものである。あまり、規則性がみられないが、焼土と鉄滓及鉄片、南北朝時代の陶器が出土しているところより、南北朝時代の鍛冶屋場の跡と考えられる。

4. 方形の土壙（土壙11）、堀の東に発見された底にぎっしり挿入した河原石を數詰めた方形の土壙は、伊那地方の城、居館址に多く見受けられるものと同形態のもので、中世城館址構造上注目すべき資料の一つである。

5. 中世の陶磁器、平安時代の陶器としては、住居址から平安末の灰釉陶器が出土している。その他グリッド及び溝状造構から南北朝～室町～桃山時代の陶器片が多く検出された。そのうち主な器種は、室町時代の天目茶碗、中国青磁等で一般庶民が使用したものでないところから、中世豪族館址を考える上に重要な資料となろう。その他、灯明皿、仏花器等仏事に関係するものも発見され、信仰上の問題も提起されることになった。

今回の調査を通じて発見された遺構遺物が、今後古代末～中世の研究に役立つことになれば幸いである。

報告書の作成にあたり、多くの方より献身的な御支援をいただいたことに対して、心より感謝の意を表するものであります。

(団長 友野 良一)



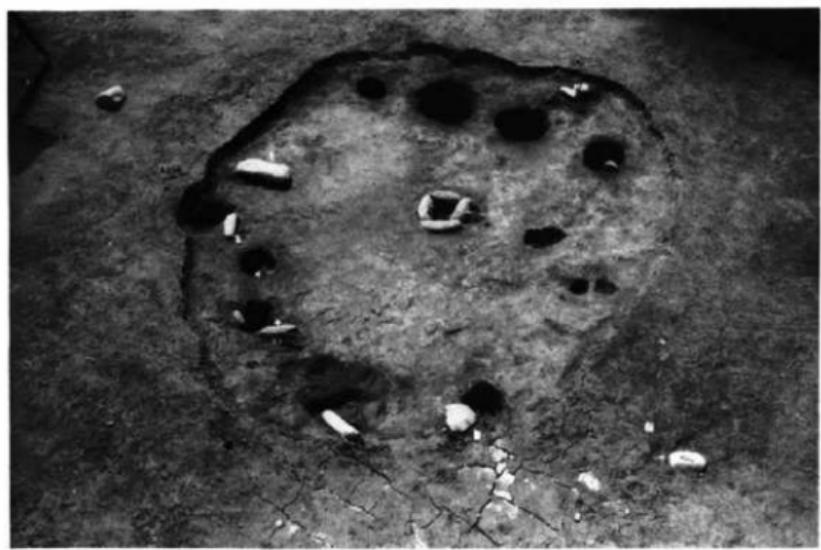
P 1 調査風景



P 2 調査風景



P 3 第3号・第7号住居址



P 4 第5号住居址



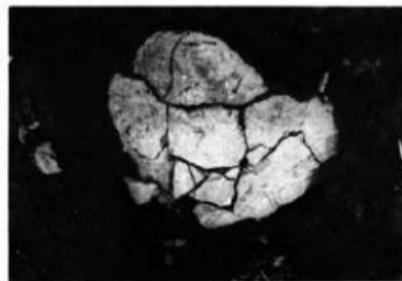
P 7 第6号住居址



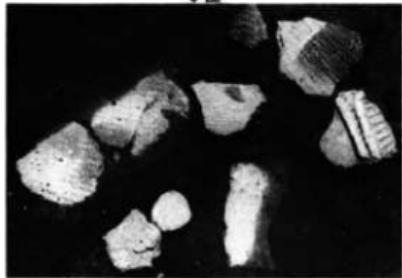
P 8 塚



5住



5住



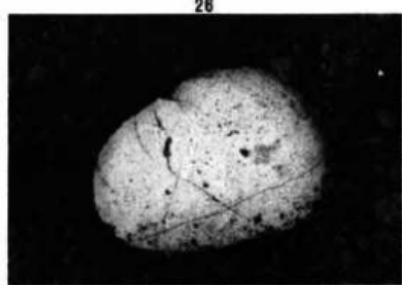
86



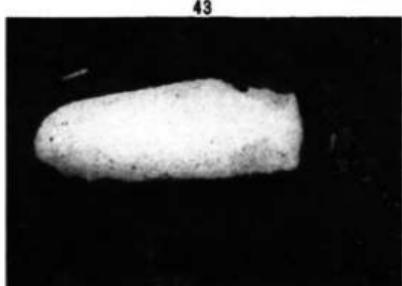
26



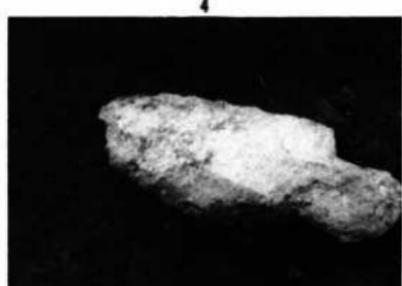
43



4

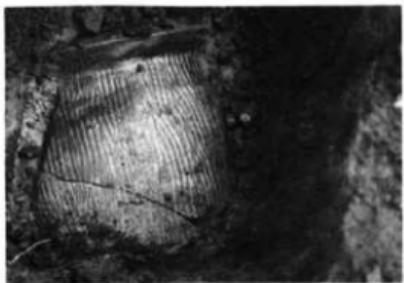


5



7

P 9 繪文時代遺物出土状況
(番号は台帳番号)



523



9



199



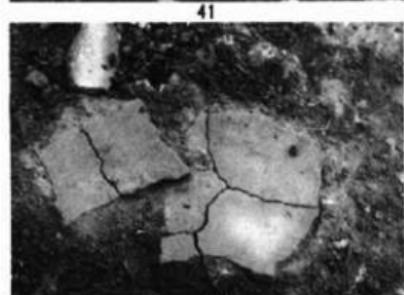
196



41



505



4 住

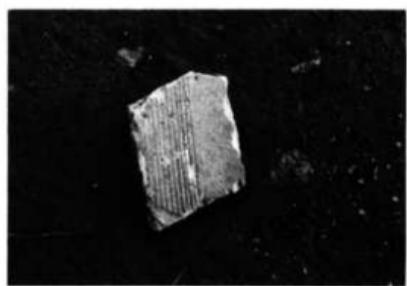


4

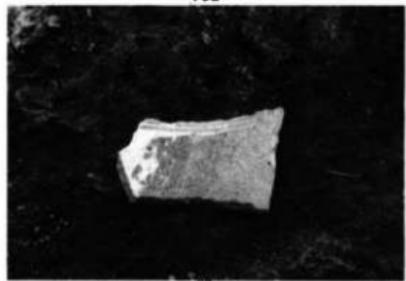
P 10 平安時代遺物出土状況
(番号は台帳番号)



192



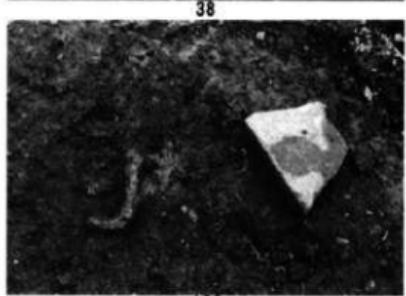
21



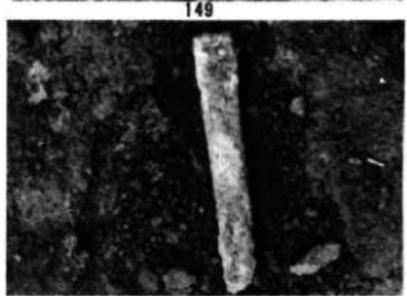
38



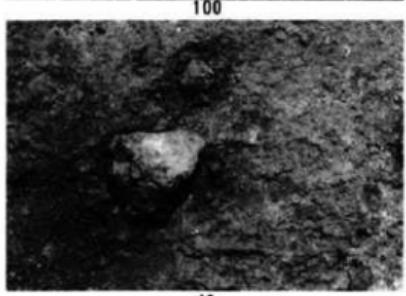
149



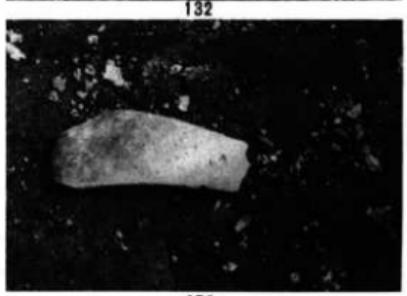
100



132



48



179

P 11 中世遺物出土状況
(番号は台帳番号)

高尾第2・本郷中原遺跡

-緊急発掘調査報告-

昭和56年3月15日 印刷

昭和56年3月20日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町

印刷所 藤原印刷株式会社
松本市新橋7-21
TEL.0263(33)5092(代)

